

エッセイ（1）

ラフィーク・シャーミーの闇—シリアの悲劇とメルヘンの世界

（初出『詩人会議』2017年1月号）

東京大学名誉教授 長沢 栄治

本文は今から5年近く前に、当時東京大学教授でいらした長沢栄治先生が『詩人会議』に掲載されたものです。先生はふとした偶然から、ドイツで活躍するシリア出身の作家、ラフィーク・シャーミー（邦訳ではラフィク・シャミ）の作品に触れられ、それらが1996年から邦訳されるようになったことと、その作品の内容が、邦訳されてから実に15年後に発生することになり、2021年末の現在も激しい内戦が続いているシリアの現状を予言するものとなっていることについて、怒りと悲しみを込めて語られています。この思いは、本ホームページ8月号に掲載された「包囲された者たちの声」（『詩人会議』2010年1月号30-32頁から転載）と同様に、一旦、発生したら解決の兆しもみえないまま、長い年月が過ぎても、人々を苦しめ続けるこの世界の在り方に、激しい、しかし、静かな怒りを訴え続けるものとなっています。

ラフィーク・シャーミーというシリア出身の詩人がいて、私たちが気付くよりずっと以前に、この世界の危機を訴え続けてきたことを、改めて知ることができました。今もなお苦しむ人々を「他人」だと思うのではなく、ひょっとしたら自分自身ではないかと考えてみることが重要なことではないかと思えてきます。

なお、長沢先生は本稿の最後に、8月号に掲載した「包囲された者たちの声」についても、省略した文献情報などを記載してくださっていますので、ご利用ください。

（塩尻和子）

ラフィーク・シャーミー（邦訳ではラフィク・シャミ）は、ドイツで活躍するシリア出身の作家である。彼の小説に接するきっかけになったのは、筆者の妻が買いおきしていた可愛らしい表紙の『夜の語り部』（邦訳1996年）であった。幸いにも自宅近くの公立図書館が作家の作品を何冊か所蔵しているので、その饒舌な語りの世界を十分堪能することができた。訳者が解説の中で述べているように、そのメルヘンの世界には『千夜一夜物語』に代表されるアラビアの「語り」の魅力があり、作家が育ったシリアの首都「ダマスカスの路地が想像できる」異国情緒があふれている。

その中で『空飛ぶ木』（邦訳 1997 年）は、自由を求めてシリアからドイツに飛んできた作家自身の姿を重ね合わせて読むことができる作品である。しかし、この本の「世にも美しいメルヘンと寓話、そして幻想的な物語」というサブタイトルに騙されてはいけない。作家の母国であるシリアや中東で起きている現実の世界に目を転じてみると、このメルヘンの世界を落ち着いた素直な気持ちで読み進めることはできないからである。

チュニジアとエジプトで始まったアラブ革命の波を受けて、2011 年 3 月にシリアでも反政府運動が起きた。しかし、この非暴力の運動は、政府による容赦ない弾圧を受ける中で、武装闘争に変化した。さらにイスラーム過激勢力（ジハード主義者）や、彼らを支援するアラブ湾岸産油国や欧米諸国が介入し、これに対抗してロシアやイランなどが現政権側を支援した結果、シリア騒乱は、出口の見えない泥沼の複雑怪奇な紛争となった。

IS（「イスラーム国」を名乗る過激組織）の台頭やヨーロッパなどでのテロ事件と結びつきながら、シリア騒乱は今世紀に入って世界最大の人道的な危機を生みだしている。すでに戦乱の犠牲者は 30 万人とも 50 万人ともいわれる数に上り、国外に流出した難民は 270 万人を超えた。そして、このシリア難民のうち 80 万人が、作家が住むドイツに流入している。シャーミー（ダマスカス人）をペンネームとする作家が、兵役を忌避し、抑圧体制を逃れ、ほぼ亡命に近い形でドイツに移り住んだのは 45 年前のことであった。

『モモはなぜ J・R にほれたのか』（邦訳 1997 年）に収録されている同名の作品で、作家はミヒヤエル・エンデの『モモ』を強烈に皮肉っている。それは作家が抽象的な理想の世界を語るメルヘン作家ではなく、現実の世界に対する鋭い批判精神の持ち主であることを示している。また同書に収録されている「親方が登場した」や「ジャガイモ王国ドタバタ狂騒曲」といった作品では、ドイツという「北の国」とシリアなど中東の「南の国」の間の関係が強烈に風刺されている。前者の「親方が登場した」には、妖精のおばあさんが魔法で作った橋が壊され、多くの南の国の人たちが崖底に落ちていく場面がある。そのくだりを読むなら、地中海でおぼれ死んだ難民や不法移民の人たちの姿を想像しないわけにはいかない。この数年たくさん的人が水死しているが、国連の報告によれば、2016 年は 10 月までで 3800 人が亡くなったという。後者の「ジャガイモ王国ドタバタ狂騒曲」では、「北の（先進資本主義）国」での第三世界からの移民に対する差別が描かれている。それはおそらく作家自身の体験にもとづくものであり、シリア難民がこれから直面していく現実を鮮烈に描いている。

これらはいずれも、今日の難民問題を予見していたかのようにさえ思わせる内容である。しかし、ラフィーク・シャーミーの作品を読みながら、現在のシリアの悲劇に思いをはせるとき湧いてくるのは、そもそもこうした悲惨な事態になったのはどうしてなのか、という問いである。こうした問いに対して、彼の作品は答えを用意しているのだろうか。

彼の作品には、千夜一夜物語に出てきそうな架空の王国が描かれ、そこには我儘で残忍な王様たちが登場する。こうした情け容赦のない専制君主たちは、どう考えても現代のシリアやイラク、エジプトなどの独裁的支配者のパロディーとしか思えない。しかし、専制

政治や独裁が生まれるには、時代によって異なった背景がある。東洋の専制君主の伝統が今日まで受け継がれていると考えるのは危険である。

一方、作品にはこうした専制政治に立ち向かう勇気のある人たちの姿も描かれている。また、怒った民衆が王宮に押しかけ、王様とその取り巻きたちが慌てて逃げ出していく話もある。これまたチュニジアやエジプトで起きた民衆蜂起を想起させる。しかし実際に、民衆の蜂起、アラブの民衆革命の結果として生まれたのは何だったろう。今回、シリアで決起した若者たちは、治安部隊や兵士たちによって無残に殺されていった。

「門のそばには、表情ひとつ変えぬ暗い顔の兵士が、おおぜい立っている。屈強な体つきに死んだ眼をした、山岳地方の若者たちだ。彼らは血に飢えた獵犬のようにアメとムチで訓練され、他人を痛めつけるほど自分の得になると信じ込まされているのだ。・・・ヴァレンティンは、遺伝子操作で増殖された死んだ眼の兵士たちが、指揮官の命令とあればなんでもやってのけるという、恐怖のSF小説を思い浮かばずにはいられなかった。その光景が、ここでは現実のものとなっているのだ。」これは『夜と朝のあいだの旅』(邦訳 2002 年) の中の一節 (同書 449 頁) であるが、今回のシリア革命における弾圧の凄まじさを連想せざるをえない。

また、この作品には主人公率いるサーカス団が「原理主義者」に襲われる場面もある。彼らはウラニア (ダマスカスと思われる町) とサニア (同アレッポ) の間にある地方都市を占拠しており、やがて政府軍との間で内戦が起きる。この話は、明らかにシリア中部の都市、ハマーで 1982 年 2 月に起きたムスリム同胞団弾圧・虐殺事件 (犠牲者の市民は 1 万 ~ 4 万人と推計される) の記憶を下敷きにしている。そして、あたかも現在の事態を予見していたように見えるのが歴史の展開として恐ろしい。

『愛の裏側は闇』(邦訳 2014 年) は、作家がたんなるメルヘン作家ではないことを世に知らしめた作品といわれる。二つのキリスト教一族の因縁の抗争を軸にして、現代シリアの厳しい政治の荒波の中を、許されない恋を求めて男女が誠実に生き抜いていく様を描いた大河小説である。その最終章で作家が制作過程を説明しているように、同書には自伝的な要素とともに、多くの証言や聞き取りの事実が盛り込まれており、現代史研究の資料としての価値も高い。

この『愛の裏側は闇』は、作者ラフィーク・シャーミー自身が抱える「闇」の深さをも示している。その闇は、現代のシリアあるいは中東、そして世界の闇へとつながっている。そしてこの闇の深淵にはパレスチナ問題がある。作品を通読して筆者が少し気になったのが、パレスチナ問題に対する作家のシニカルな見方である。この問題を含めて、中東で起きている悲劇を理解し、新しい光の道を探し出すために、ラフィーク・シャーミーの作品から学ぶものは多い。

〔追記 1〕 以上の初出の原稿では、省略した文献情報を以下に記します (引用順)。

ラフィーク・シャミ (松永美穂訳) 『夜の語り部』 西村書店. 1996[1989]

同 [池上弘子訳]『空飛ぶ木』西村書店. 1997[1991]

同 [池上純一訳]『モモはなぜ J・R にほれたのか』西村書店. 1997[1991]

同 [池上弘子訳]『夜と朝のあいだの旅』西村書店. 2002[1995]

同 [酒寄進一訳]『愛の裏側は闇』(上・下) 東京創元社. 2014[2004]

[追記 2] 8 月号に掲載した「包囲された者たちの声」についても、同様に省略した文献情報などを以下に記します（引用順）。

・ポーリン・カッティング [広河隆一訳]『パレスチナ難民の生と死—ある女医の医療日誌』岩波書店. 1991[1988]

・Radwa Ashour, trans. William Granara, *Granada, A Novel*, Cairo: The American University in Cairo Press.

（原著 Raḍwā ‘Āshūr, ghuranāṭa. 3 vols. Cairo: Dār al-Hilāl. Vol.1:1994, Vol.2&3:1995 は、三巻本だが第 1巻のみの翻訳。スペイン語では全巻が訳されているという。ラドワー・アーシュール氏は、2014 年に逝去されたが、パレスチナ問題に関して『タントゥーラの女』という小説 Raḍwā ‘Āshūr, *al-tantūriyya*. Cairo: Dār al-Shurūq. 2010. も著している。岡真理氏がその一部を紹介しているが、タントゥーラとは、ハイファの南の海岸沿いにある村で、1948 年 5 月 22 日から 23 日にかけて建国まもないイスラエル軍の攻撃を受け、数十名（一説では 52 名）が虐殺された。同村の跡地は、現在、海水浴場の駐車場となっている。

ラドワー・アーシュール氏の夫とは、パレスチナ人詩人のムリード・バルグーティー。その自伝小説『私はラーマッラーを見た』は、第一回ナギーブ・マハフーズ賞を受賞した。

Mourid Bargouti, trans. Ahdaf Soueif, *I Saw Ramallah*. Cairo: The American University in Cairo Press. 1997. 同書にはエドワード・サイードの序文が付けられている。原著は Murīd al-Barghūthī, *ra’aytu rām allāh*. Cairo: Dār al-Hilāl. 1997. 同氏には、イスラーム地域研究プロジェクト・カイロ国際会議（2009 年）のパレスチナ・セッションにコメンテータとして参加していただいたことがある。最近、本年（2021 年）2 月に逝去されていることを知った。謹んでご冥福を申し上げる。

ご夫妻の子息、タミーム・バルグーティー氏は、政治学者であるが、著名な詩人としても活躍されている）。

・鈴木規夫『現代イスラーム現象—その恐怖と希望』国際書院. 2008.